

「播隆上人の槍ヶ岳開山と飛州新道」

—信州の鷹匠屋・中田又重郎と共に—

穂苅 康治

槍ヶ岳山荘グループ代表



播隆像 上條俊介作
岳都・松本の玄関口（JR松本駅前）に建つ播隆像

江戸時代後期の念仏行者 播隆がその修行の道中、日本山岳史上に遺した功績は輝かしいものがある。文政年間（1818～1830 年）に於ける伊吹山禪定、文政 6 年（1823 年）の笠ヶ岳再興、文政 11 年（1828 年）の槍ヶ岳開山、そして開山のその足で行なった穂高岳登拝。それらの偉業は播隆ひとりの力で行なわれたのではない。播隆を支えたのは当時の民衆の願い、祈りであった¹⁾。

播隆の生涯¹⁾

播隆は江戸時代後期、天明 6 年（1786 年）に越中国河内村（富山県富山市河内）で生まれた。山里に育った播隆は、10 代のある時期に故郷を出、家は浄土真宗であったが、上方（京都、大阪）、尾張（名古屋）の各宗寺院を遍歴した後、浄土宗の僧侶となった。

播隆の純粋な求道心は当時の宗教界に馴染まず、修行の場を山岳（修験道）に求め、各地の深山幽谷で念仏行を実践した。山における播隆の足跡は伊吹山禪定、笠ヶ岳再興、槍ヶ岳開山、穂高岳登拝と山岳史の上に輝かしい功績を残した。

播隆は自らの修行だけに生きた念仏行者ではなく、里にあっては念仏の普及に努め、分かり易く教えを説き、民衆と共に生きた聖（民間宗教者）の一人であった。登拝信仰を確立して槍ヶ岳開山を成し、念仏講の人々を山上へと導いた。

天保 11 年（1840 年）、槍ヶ岳の登拝者のために念願であった「善の綱」鉄鎖を山頂に設置、岐阜県美濃加茂市の中山道 太田宿で行年 55 歳をもって死去した。



播隆上人の活動

播隆上人の生家中村家は川内道場と称し、代々一向宗の道場（どうじゃ）であった。大洪水等で一時廃止されていたが、播隆上人によって復活させている。

播隆上人の活動範囲は、尾張、三河、美濃、飛騨、信濃、山城、摂津、和泉、越前、江戸と広範であった。

播隆上人開祖のお寺

岐阜県揖斐郡揖斐川町『城台山 一心寺』（阿弥陀堂、阿弥陀寺と呼ばれた時期もある）
徳川家直参旗本岡田伊勢守善功の家老 芝山長兵衛より 天保元年 寄進
岐阜市柳沢町 9 正道院 岐阜市金屋町の岡本太右衛門 天保元年 ？

槍ヶ岳、笠ヶ岳以前の修行場所

美濃一宮南宮山奥院（文政3年、文政6年、文政7年）現在、場所不明

伊吹山池谷の峰、播隆屋敷（文政4年、文政8年）

飛騨岩井戸村「杓子の岩窟」（文政4年）

伊吹山 字「みたらし」（文政9年）

伊吹山頂 字「八つ頭」（文政13年）

笠ヶ岳再興 笠谷よりの登山

文政6年（1823年）6月、偵察登山。7月29日、完成見分登山。

8月、御礼報謝のため登山、1行18人。この時、ご来光（ブロッケン現象）を拝す。

文政7年（1824年）7月、村人66人とご本尊の阿弥陀仏を安置すべく登山、ご来光を拝す。

飛騨18代郡代芝源正盛も再興勘請施主に名を連ねている。（迦多賀嶽再興記を記す、高山市上宝町本覚寺蔵） 高山市上宝町本覚寺椿宗和尚にお世話になる。

槍ヶ岳開山¹⁾

播隆の槍ヶ岳開山の道案内人となったのは安曇野市三郷小倉の中田又重（またじゅう or 又重郎）であった。又重はいつも播隆の槍ヶ岳登山に付添い、影のように働いて播隆を支えた槍ヶ岳開山の功労者である。

播隆は登山道を整備し、山頂を平らげて「善の綱」（仏と縁を結ぶ綱。山頂でブロッケン・御来迎を拝する）と名付けた鉄鎖をかける。松本市内の玄向寺には御来迎の様子を詳しく記した『三昧発得記（さんまいほっとくき）』が残されている。登拝信仰を確立した播隆は富士講、御岳講のような槍ヶ岳念仏講を組織していた。

播隆上人の槍ヶ岳開山年表

文政9年（1826年） 播隆上人、又重とともに第1回槍ヶ岳登山、小倉村馬口の大日堂を出立して、大滝山までは飛州新道を通る。

大滝山から蝶ヶ岳へ向かい、蝶ヶ岳から常念岳へ向かう尾根を辿り、途中熊倉沢（現槍見沢）を下り梓川へ出て、槍沢への道をとった。

槍沢をつめた台上に天然の岩屋があり、ここを登頂ルート探索の基地とした。（後年、坊主の岩小屋と呼ばれる。）

文政11年（1828年） 播隆上人、3体の仏像と3人の弟子とともに小倉村より、又重の案内にて7月17日、第2回槍ヶ岳登山に向かう。7月20日、初登頂に成功。山頂に岩を集めて祠を作り、3体の仏像を安置し、槍ヶ岳開山を成した。

穂高岳のいずれかの頂に名号碑を安置した。

小倉村に下山し、17日の別時念仏。再会を約束し、別離の歌を送り出立。

天保4年（1833年）8月、播隆上人、弟子5人とともに又重の案内で、第3回槍ヶ岳登山。播隆上人は一人岩小屋で勧行。8月下旬、又重ら衰弱著しい上人を発見し、又重に背負われて下山。

天保5年（1834年）6月、播隆上人、又重の案内で、第4回槍ヶ岳登山。山頂を平らにし、新たに木造の祠を設置し、先年納めた3体の仏像に1体加え安置、さらに穂先に70間（約130m）の藁の綱を設置。この綱を「善の綱」と名付ける。
7月6日、西鎌尾根より笠ヶ岳へ縦走、阿弥陀様に出会う（ブロッケン現象）。
8月12日、53日間の参籠を終え、下山。26日、「善の綱」の提供者、野沢村の庄屋 務台景那を訪問し謝礼、真元僧庵訪問。

天保6年（1835年）6月22日、真元僧庵に招かれて説法会をおこなう。
6月24日、播隆上人、又重の案内で弟子4人とともに第5回槍ヶ岳登山。播隆上人、弟子1人を伴い飛騨沢を下り蒲田に向かう。
10月3日、播隆上人、野沢村庄屋 務台景邦の弟景満、又重倅亀吉ら8人、牛首（冷沢）にて冬ごもりの小屋がけに出立。悪天候のため、翌日下山するも、上人凍傷にかかり、足の指2本を失う。野沢村庄屋宅で20日ほど療養、その後9か月間、上長尾阿弥陀堂にて療養。

天保7年（1836年）3月、上長尾村 播隆上人の六字名号碑を平福寺に建立。7月23日、流言のため上長尾村阿弥陀堂を去り美濃に向かう。
播隆上人の支援者の浄財で作られた鉄鎖8本は、松本藩により差し押さえられた。

天保11年（1840年）春、播隆上人は松本に來られ各地をまわられたが、体調を崩し7月より松本玄向寺にて病氣療養に入られた。
8月、百瀬茂八郎らの尽力により、鉄鎖は松本藩より返還され、信者たちにより槍ヶ岳に鉄鎖がかけられ、大願成就する。9月、玄向寺より各所を回り美濃に帰る。
10月21日、美濃国太田宿の林市左衛門方で大往生。

中田又重と飛州新道

中田又重、寛政8年（1796年）長尾組小倉生まれ。
長尾組（安曇野市三郷）代々鷹巣見役を務める本家「大西」に対し、分家「小西」で寺子屋の師匠を務める。狩猟鉄砲も許され、鷹巣見役の傍ら狩猟もおこなっていた。
文政9年（1826年）、播隆上人が案内人を求めて、本家「大西」の中田久左衛を訪ねたが、自分が高齢のため新宅の又重を推挙した。

飛州新道開削

成合組岩岡村の庄屋岩岡勘左衛門英信が計画し、2代目伴次郎英総が実行に移す。
文政1年（1818年）、成相組岩岡村庄屋2代目伴次郎英総、小倉村庄屋嘉長次を訪ね、協力を要請。

文政3年（1820年）、2代目伴次郎 春 松本藩へ新道開削願い提出。

中田又重、2代目伴次郎、平瀬村直吉の名代2名と高山支配所への「新道開削願い」の願人協力要請に出かけるも、協力者は現れなかったが、松本領内の開削をはじめ。



播隆肖像画

10月10日より、小倉村馬口から開削工事着工。

文政4年（1821年） 2代目伴次郎、小倉村に労力提供を要請、庄屋、組頭、又重ら熟慮の上、村のためになる道ということで、3月3日より村方一同道づくりに励み、馬口から1里奥のあきんど岩まで完成。

文政5年（1822年）、高山支配所へ願書提出のため、又重、2代目伴次郎、直吉を案内し飛州新道開削予定地を通り高山へ。

野麦峠を越えてきた成合組本村七右衛門、松本伊勢町飛驒屋平 三郎、玉屋伊兵衛宅で落ち合い、願書を高山支配所に提出するも無視され、説明もなかった。

文政7年（1824年）、飛州新道、小倉馬口より上口まで完成。又重、開通した飛州新道の見立て案内を務める。

文政13年（1830年）3月、2代目伴次郎、本村丸山七左衛門、上口に湯屋開業。

天保5年（1834年）、本覚寺住職椿宗の協力により伴次郎や飛驒、信州の村の飛州新道開削願いが、高山支配所に受理される。飛驒側の開削費用の負担をすることが条件。

天保6年（1835年）、高山郡代大井帯刀 新道開削願いを幕府勘定書に提出。

6月17日新道開削許可がおりる。8月11日、竣工。

飛州新道開削の必要性

松本—稲核—平井峠（安房峠）—飛驒高山 山道 25.5 里

寛政2年（1790年）に平井峠コースが高山郡代により閉鎖され、野麦峠越えのみとなったが、そこは御3家 尾張藩の管理下にあり、荷物輸送には不向きであった。

富山—糸魚川ルートと飛驒新道と比較すると、25里ほど短縮され、信州人の好きな魚介類の運送にも好都合。

松本から高原郷は、野麦峠だと38里、飛州新道を使うと14里。

さらに、松本では、文化13年（1816年）に等々力孫一郎ら10か村の指導者が協力して拾ヶ堰という延長15kmの用水路を3か月の工期で完成させ、6百町歩の農地を安曇野に生み出している。（10か村の協力でできた用水なので、拾ヶ堰と呼ばれている）

飛驒で慢性的に不足している米を松本から供給し、松本で不足している海産物を飛驒経由で運ぶ事を計画した。

以上

引用文献

1. 播隆祭実行委員会発行「パンフレット」、発行日：平成19年5月1日
2. 写真3枚は、上記パンフレットから転載。